

複言語話者が持つ日本語学習ビリーフ : 多言語環境 と「話す」ことへの自信の観点から

良永, 朋実

<https://hdl.handle.net/2324/4475210>

出版情報 : 九州大学, 2020, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (3)

氏 名	良永 朋実			
論 文 名	複言語話者が持つ日本語学習ビリーフ —多言語環境と「話す」ことへの自信の観点から—			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	松永 典子
	副 査	九州大学	教授	郭 俊海
	副 査	九州大学	准教授	志水 俊広
	副 査	九州大学	准教授	李 相穆
	副 査	京都大学	教授	西山 教行

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

言語学習ビリーフ（以下、ビリーフ）は「個々の学習者の違い（Kalaja & Barcelos, 2006）」の一つであり、「言語学習の様々な側面・次元について、学習者が抱く信念の総体（Horwitz1987）」である。先行研究では、ビリーフは学習者の背景によって異なり、学習者の戦略選択や習得度にも影響を与えることがわかっている。また、教師と学習者のビリーフが合わない場合、学習活動への参加度や動機づけに影響を与え、結果として学習を阻害する可能性もあるとされている。しかしながら、これまでに明らかになっている学習者のビリーフは、あくまでも学習者を母語や出身地などの特定のグループに分けて調査をしたものである。グローバル化が加速する現代においては、学習者の持つ背景も多様化しているため、学習者を一つの要素でカテゴリー化することには限界がある。

そこで本研究では、多言語環境において CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) の複言語主義に基づく言語教育を受けてきているヨーロッパの複言語話者に着眼し、複言語話者が持っている言語学習に関するビリーフ、および日本語学習に関するビリーフを明らかにすることを研究の目的とした。研究課題として設定したのは以下の 2 点である。

①ヨーロッパの複言語話者が持つ言語学習・日本語学習に対するビリーフには、どのような特徴があるのか

②ヨーロッパの複言語話者が持つ日本語学習に対するビリーフは、ヨーロッパの多言語環境においてどのように形成されたのか

以上の研究課題を解明するために、ベルギーの 3 つの教育機関において日本語学習者 248 名への質問紙調査と、日本在住者も含め 15 名の複言語話者へのインタビュー調査を行った。事例としたベルギーは 3 言語を公用語とする多言語環境であり、複言語主義に基づく言語教育が行われているため、多くの国民が複言語話者である。

本論文の構成は、まず第 1 章で研究背景と目的を述べ、第 2 章でヨーロッパにおける言語政策・言語教育の現状、特に本稿のキーワードとなる CEFR や複言語・複文化主義について紹介する。次の第 3 章では、第二言語習得やビリーフの先行研究を概観し、本研究における研究課題や研究方法を述べる。第 4 章では複言語話者と単言語話者のビリーフを比較し、第 5 章と第 6 章では複言語話者のビリーフの詳細とその形成過程を明らかにする。最後に、第 7 章で総合考察を行い、本研究の結論をまとめる。

質問紙調査の結果を統計分析した結果、複言語話者が持つビリーフには、日本語学習における「母語依存の低さ」や「正確さへのこだわりの低さ」、「他の学習者との協働学習への積極性」などがあることがわかった。中国語母語話者（芦 2013）や韓国語母語話者（呉 2007）のビリーフと比較すると、「正確さ重視」や「教室活動への消極性」という点が異なり、複言語話者が持つビリーフは単言語話者のビリーフとは異なることがわかる。ドイツ人日本語学習者のビリーフを見ると、「誤りに対する恐怖心の低さ」、「教室内におけるドイツ語使用への寛容さ」が共通しているが、フランス人日本語学習者のビリーフ（國友 2012）と比べると、「4 技能のあらゆる側面から学びたい」点では共通していたものの、「母語への依存度」や「正確さへのこだわり」で大きな差があった。つまり、同じヨーロッパの学習者と比較しても、今回対象とした複言語話者のビリーフは異なる点があると言える。また、多言語国家フィリピンの学習者は「文法重視」、「誤りに対する寛容性がやや低い」といったビリーフを持っている（片桐 2005）が、これは本研究の複言語話者のビリーフとは正反対のものであるため、同じ多言語環境でも学習者のビリーフは異なることがわかる。

インタビュー調査の結果を M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ：Modified Grounded Theory Approach）を用いて分析した結果、複言語話者が自身の複言語・多言語背景や環境について自認していることや、彼らの意識の中に複言語主義の考え方が反映された言語観が培われていることがわかった。さらに、日本語は彼らの母語や日常使用言語とは言語的に距離のある言語であるにもかかわらず、「自分は日本語を習得できる」という強い自信、つまり成長マインドセット（Dweck 2007）を抱いていることが明らかになった。彼らが抱いているこの自信は、これまでに複言語を学習・習得してきた経験や、言語・言語学習に関する価値観からくるものであると考えられる。このように、今回調査した複言語話者は日本語学習に対して統合的動機づけと成長マインドセットを持っているため、それらが話す能力の向上につながっていると考えられる。

また、インタビュー調査の結果からは、複言語話者は単なるコードスイッチングを行っているのではなく、これまでの言語学習の経験を日本語学習に生かしていること（西山 2010）も確認できた。これは単に今回の調査対象者が複数の言語を話すことができるというだけでなく、彼らの中に複言語能力が備わっている証だと言える。

三代ほか（2006）は「正しい日本語」を目指す日本語教育の問題点について指摘しているが、本研究では、学生と教師の双方がコミュニケーションに支障をきたさない程度の誤りを許容すること、また、日本語以外の言語使用を許容することが、複言語話者の日本語学習の促進あるいは学習意欲の向上につながる可能性が示唆された。

以上のように、本研究の知見は、複言語話者のビリーフという切り口から第二言語習得研究に新たな知見をもたらすものとして、博士（学術）に値する価値ある業績であると判断された。